

曉

網完壁元美兼一押子（印）や（ヤ）救内（智）代奉書（肥）減直（價）償（け）見（け）也（も）

玄冠一瑞（端）鷄助（け）ふ（ふ）亭（亭）陰陽形（陰）蹈張福涕（張）の（の）洞補文（洞）の（の）附（附）

越打振（越）懸動（懸）後縁（後）酷吏（酷）金平（金）五散（五）慇苦（慇）捐（捐）

て賜單（賜）的礼危甫（的）西裴斯（西）館混露（館）憧（憧）さ（さ）浮（浮）舊祭文（舊）

切（切）薛儀派（薛）石動山（石）み（み）持（持）堂（堂）陳（陳）徐文伯（徐）茶芝園（茶）

太（太）協（協）頤（頤）耳珠（耳）小文沉（小）花真改（花）淨衣（淨）贍儀（贍）抄（抄）自（自）激（激）揺（揺）

敷（敷）入（入）無（無）佛（佛）會下（會）ひ（ひ）日御門（日）白（白）鼻（鼻）日（日）院（院）

毛義（毛）義（義）茂遠（茂）世父（世）切破絶（切）死（死）す（す）柄（柄）背（背）

十月 月 日 二 三

蘭例節用集の補訂版について

鈴木博

わたくしは先頃複製の『蘭例節用集』（昭和四十三年十二月臨川書店

刊）に簡単な解題を付したが、その後、複製の底本とした文化十二年

（一八一五）版の『蘭例節用集』（後述の増補版・補訂版に對して元版と

呼ぶ）に對して、著者廣川獬自身による増補版（後述の⑬）・補訂版

（後述の⑭）の出ていることが判明したので、元版と増補版・補訂版と

の相違の主なるものについて記し、あわせて舊稿に對する補正を述べ

たいと思う。

今までに知り得た範圍で『蘭例節用集』の所藏機關および個人を掲

げると左のとおりである。

① 大東急記念文庫 元版。包背裝で三か所銕止め、濃紺表紙、

題簽は「蘭例語典」。

② 京大言語学研究室 ①に同じ。

③ 靜嘉堂文庫 ①に同じ。

④ 天理圖書館A ①に同じ。題簽なし。

⑤ 天理圖書館B ①に同じ（複製本解題5頁）。

蘭例節用集の補訂版について

⑥ 宮内廳書陵部 ①に同じ。

⑦ 慶大圖書館 ①に同じ。ただし兩端二か所が銕止めで中央

が糸綴じ。

⑧ 京大圖書館谷村文庫 元版。糸綴じ四針、黃褐色表紙、龜甲

紋の模様。

⑨ 東北大圖書館狩野文庫 ⑧に同じ。

⑩ 内閣文庫 ⑧に同じ。

⑪ 早大圖書館 ⑧に同じ。

⑫ 若林正治氏 元版。糸綴じ五針。

⑬ 國會圖書館 増補版。包背裝五針、薄茶色表紙に菱形の織出

し模様、外題は「蘭例節要集」^{（マテ）}（朱筆）。

⑭ 新村徹氏 補訂版。糸綴じ四針、絹裝（前表紙は絹が剝落して

いるけれども、見返しに一部が、そして後表紙には全部が残存）、抹茶

地に薄青色の草花模様、外題は「廣川獬編 文化十二年自序／蘭

例節用集」（新村出博士筆。徹氏は博士の令孫）、重野安繹舊藏。

このほかに『國書總目錄第五卷』の「節用集」の條には東大と成實堂文庫とも所藏の旨が記載されているけれども、東大圖書館の總合目錄にはなく、成實堂文庫は閲覧許可の恩澤に浴しない。

⑬の國會圖書館本は、①②の元版と違って終りの方に「補缺部にもれたる」という一丁分が增補されている。⑭の新村本にもこの増補の一丁が第五百十三丁として、第五百十一丁と第五百十二丁との間に綴じられている（⑭には最終の著目表がない）。すなわち冒頭に掲げた圖版に示すとおりであるが、圖版1の方が裏でそれにつづく圖版2の方が表であつて、表と裏との順が——意識的にか？——入れ違えて彫つてある（版心丁づけは表から見ると百五十三で裏から見ると百五十二）。⑬には圖版1の上部欄外の「かたくり」についての追刻がなく、また第五百十三丁以外の個所でも⑭は元版の本文を訂正改刻しているところがいれば見られるけれども、⑬は元版のままである。ただ⑬では「補缺」を挿入するにあつてその表と裏とを分離し、第五百十二丁の表（本文の最終）と裏（跋）をも分離し、第五百十二丁の裏が補缺のはじめになるように、そして補缺のあとの方が第五百十三丁表で、その裏にもとの第五百十二丁裏の跋がつづくように、それぞれ薄葉紙に半丁ずつ貼りつけて袋綴じにしている。つまり順序正しく仕立て直しているのであるが、そのように仕立てる予定のもとに補缺の表と裏とが入れ違えて彫られ、丁づけも表から見ると百五十三に、裏から見ると百五十二に彫られたのかも知れない。もつとも⑬の表紙は原裝のままでない疑いがある。左端の朱書きの外題が「蘭例節要集」と傍線部を誤り、

裏打紙も明治以降のものと考えられる（裏打に使われた反故紙に「右本昨日傘台ニ……五月二十八日 事務課御中」という墨書がある）からである。

⑬の最終の著目表の末に「珍玩書」と朱書されているが、これは舊藏者の記したものであろう。裝本の状態から見て著者の愛着が最も深く感じられるのは⑭であるが、前述のように前表紙の絹が剝落していて原題簽が存しないことは惜しい。藏書印は自序のはじめに(出)・

新邨氏圖書印

成齋藏書

の三個があり、終丁の跋文の末に

新村家藏

とある。「成齋藏書」の朱印は明治四十三年に没した

重野安釋の藏書であつたことを意味する（小野則秋氏『日本藏書印考』による）。⑭は増補一丁分を有するほかに元版の本文をも改訂している補訂版である。その本文改訂の數は、圖版1と同様に上部欄外へ補刻することが一（後掲⑨の圖版）、本文へ改刻して繪を描き入れることが三（後掲⑨・⑩・⑭の圖版）を含めて、大小あわせ六十個所ほどである。元版の刊年時は跋文の年時が「文化乙亥秋九月」なので、文化十二年九月（またはその少し後）頃かと考えられる。その後に⑬の増補版が出され、さらに遅れて⑭の補訂版が出されたはずである。しかし⑬

も⑭も元版の跋文をそのままつけているだけで、それぞれの刊年時を新たに示すようなものは何もない。⑬はまだしも、⑭のように多くの彫り直しを行なうとすれば文化十二年中に補訂版を刊行することは難しかったのではあるまいか。もし⑭に著目表の存しないことが広川の意志によるものであると仮定すれば（⑤に船の繪と著目表とがないのは誤脱であらう。⑭には船の繪はある）、⑬には付されていた文化十一年六月

の著目表を⑭で除いた理由は、⑭の刊年時と著目表の作成時との距りが増したためではなからうかと臆測される。そもそもこの著目表の最後の書が「蘭例節用集」であつて、

和蘭陀の例に習ひ字をつらぬ。此書一切売店に出さず。彫刻家藏して同好書寫の勞をはぶく。若述作の趣向を襲ひ擬造する有バ、千里正窮すべきなり

と述べている文言は、本書の末に付すためのことばではなく本書の前に刊行した書の末尾に付すべき廣告であらう。しかし本書刊行の直前にこの廣告を付して刊行した廣川の著書があつたか無かつたかは不明である。いずれにせよ、⑭の刊年時は文化十三年以降ではあるまいか。

元版と⑭との相違する個所を⑬について檢すると、中に墨筆書入れの訂補が二個所あり（後述の③と④を参照）、その訂補の姿は⑭と一致する。その點からこの書入れは廣川自身の手になるのではないかとも思われるのであるが、數が少ないうに廣川以外の者でも訂補し得る可能性がそれ自體にあり、かつ、この二個所が同筆ではなさそうであるし廣川の自筆（天理圖書館藏『蘭香』第一帖所收の詩の短冊）とも異なるように思われるので、この假想は霧消するであらう。⑬には朱筆の書入れも二二ウ〜二三ウに見られるけれども、これは⑭とはまったく關係がない（たとえば二三ウ七行目の「一どうげんし元し禪し師し越し前し永し平し寺しの」とある「の」の下に、⑬では「祖」と朱筆で補入されているが、⑭にはそのような追補はなく元版のままである）。ついでに、⑤・⑨の上部欄外などの墨筆書入（⑤は天保十三年頃か。⑨は嘉永四年頃か）もともに⑭とは無關係である。

蘭例節用集の補訂版について

補缺の部の語數は⑬が一三三、⑭が一三四であつて、⑭においてこれ以外に増加している語數は二五で、減少している語數は一三である。結局⑭は元版よりも一四六の語數が増加していることになる。補缺の部は「本部にもれたるを補ひ出す」（⑭は傍線部の「る」が虫損）として、いろは各部ごとに、ほぼ本部に準じた意義分類順に語を配し一個所繪も入れている。本部が各語のはじめの二音節までのいろは順の下で意義分類をしたのに對して、補缺の部は舊來の多くの節用集の類の體裁に従つていたのであるが、收載語數の少ない場合には利用者にとつてこの方が便宜であると言えるであらう。

⑭の新村本において補缺の部以外の個所で元版とどのように相違しているかを示す。複製本での複製具合の不充分なものも含める。↓の上が複製本（元版）で、下が⑭（補訂版）である。數字は複製本の頁・行、および版本の丁・表裏である。

- (1) 素いろ服の禮の【言】好いろ色の ↓素いろ服の【言】花いろ狂の好いろ色の〔九六・一才〕
- (2) 抱いだく 懷い ↓抱いだく 懷い 徒いたち 〔一三五・六・三才〕
- (3) 一いっ遍へん上じやう人とん ↓一いっ遍へん上じやう人とん 〔一四二・三ウ。複製本「し」 ↓元版「じ」。元版「べ」 ↓補訂版「へ」〕
- (4) 一いっ幅ふく ↓一いっ幅ふく 〔一四四・三ウ〕
- (5) 一いっ生しやう懸けん命めい ↓一いっ生しやう懸けん命めい 一い色の ↓一いっ生しやう懸けん命めい 一い色の 一い瓶びん ↓一い統と 〔一四七・八・三ウ〕

(6) 1 循 いんしゅんとして 印可 いんか 又 また 修二印術 しゆにんじゆつ 印可 いんか 〔一六三・四ウ〕

(7) はい はい ↓ はい はい 〔二二八・七ウ〕

(8) 鈔 しやう 鮎 りゅう ↓ 正 せい 要 よう 〔二四二・八ウ〕

(9) 漆姑草 しつこくさ 小草なり こそうなり 〔二八六・一〇ウ〕

△注▽



(10) 1 人 ばんじん 1 子太 ばんこ 范文正公 はんぶんせいこう 良將たらでハ りやうしやうたらでハ 良醫たらんの言 りやういたらんのごん 言有宋史 ごんいうそうし 〔二九八・一一オ〕

良將たらすハ
良醫たらんの言
あり 宋史

(11) 1 扁豆 へんとう 1 頂花 てうけ ↓ 1 扁豆 へんとう 1 頂花 てうけ 田字草の でんじそうの 花本草水 はなほんそうすい 草二出 そうにで 〔三一五・一二オ〕

(12) 蓮池州 れんちしゅう 癰 おん ↓ 蓮池 れんち 〔三四六・一三ウ〕

(13) 錦様血 にしきやまけ ↓ 錦様血 にしきやまけ 〔三八四・一五ウ。複製本には濁點がない

が、元版も補訂版も濁點がある〕

(14) 心醉 しんそい ↓ 心醉 しんそい 〔三九七・一六オ〕

(15) 瓶 びん 一 いち、 花又酒 はなまたしゆ ↓ 〔四六六・一九ウ〕



(16) 徒黨 とだう 途絶 とだつ 除炭落 とたんおつ ↓ 徒黨 とだう 途絶 とだつ 除炭落 とたんおつ 徒黨 とだう 途絶 とだつ 〔五二二・

二二ウ〕

(17) 1 弘景 こうけい ↓ 弘景 こうけい 〔五四七・二三ウ〕

(18) 大判 おほはん 後藤印十兩 ごとういんじゅうりやう ↓ 大判 おほはん 後藤印十兩 ごとういんじゅうりやう 〔七六七・三四ウ〕

(19) 講 かう ↓ 1 講 かう 〔八四三・三八ウ〕

(20) 青茅 せいぼう ↓ 青茅 せいぼう 〔八五七・三九オ〕

(21) 呵 か、 大笑 だうしやう ↓ 綴屬 ていじゆく 〔八七一・四〇オ〕

(22) 【言】假字書文 かながしきよぶん ↓ 假字 かながしき 假名 な 〔八九五・四一オ〕

(23) 寒山拾得 かんざんしつとく ↓ 寒山拾得 かんざんしつとく 〔九一・四二オ〕

(24) 函丈 くわんちやう ↓ 函丈 くわんちやう 〔九一・四二オ〕

(25) 大威德明王 だいゐとくめいおう ↓ 大紅蓮 だいこうれん 大寒内裂 だいかんないれつ 如蓮のくるしみ にょれんのくるしみ 〔一〇六七・四九オ〕

(26) 【食】太極丸 たいぎよくわん 勞症の妙藥 らうしやうのめうぎやく 勞八元より不治なれども其 / 始に早く此藥を服して十に八九治す はじにやくしく此やくをふくしてしゆに八九ちす ↓ 代赭石 たいしやくせき 具 ぐ

【食】太極丸 たいきよくへん 症 勞 始に早く此藥を 〔一〇八三・四・五〇ウ〕

(27) 貯る金銀 同 殖 同 鐵砲の 〔一二六五・五四ウ〕

(28) 音色の玉 音色の 〔一三一五・六二ウ〕

(29) 【言】浮世 沈 楊 身 憂目 一思 浮書 景 一世書 風俗 【言】

浮沈 一名 楊 憂目 一思 〔一五二一・七二ウ〕

(30) 【言】言 〔一五四四・七三ウ。元版は「言」の第一畫がほとんど消えている。補訂版ははっきりしているけれども〇でかこまな

(31) 吳服 吳服 〔一六一三・七七ウ〕

(32) 魚梁 魚を 魚梁 釣 〔一六七二・八〇ウ〕

(33) 創掛 義詳ならず檜よりとる火を受けて歸 創掛 義詳ならず 結戒

人 制戒 道を 禁足 修す 〔一七八六・七・八五ウ〕

(34) 武藤 姓 太占 古事記 武藤 〔一八四三・八八ウ〕

(35) 無事 普茶 茶を 〔一八五一・八九ウ〕

(36) 章軌範 章軌範 〔一八七九・九〇ウ〕

宋ノ謝枋得

蘭例節用集の補訂版について

(37) 總綴 同 總忽 〔一九〇四・九一ウ〕

(38) 花風 花風 〔一九二二・九二ウ〕

(39) 定家卿 成 定家卿 俊成 〔二〇二四・九七ウ。⑬は

「俊」の字を墨筆で書入れ

(40) 野を 草江 香河 安積山奥 〔二一六九・一〇四ウ〕



〔注〕

(41) 佐伯豊 佐伯豊 〔二一九二・一〇六ウ〕

(42) 閑遮 閑遮 〔二二〇七・一〇六ウ。元版のルビははじめ

「さへわたる」 ① とあつたようである。その誤刻を訂正しようとして紙を切りつぎして「さへきる」 ② ③の最下字は「な」のごとく、「は」

のごとく、判讀しがたいが、「同」か。⑤の最下は一字分穴あき。⑥として、

「さへきる」 ③ ④ ⑤、最下は一字分穴あき。「きる」は墨書のようにである。⑧として、

「さへきる」 ③ ④ ⑤、最下は一字分穴あき。⑧として、⑧のルビは漢字二字に對して施されており、かつ二字の左側にも「さへ

(43) 三々九度の数 ↓ 竄入 祭義註ニ
後儒一入 「二二五五・一〇九オ」

(44) 頃日刻 ↓ 頃日刻
「二三六二・一一四ウ」
又一日限ヲきやうとす

(45) 襦衣 衫 ↓ 襦衣 衫
「二五三七・一二三オ」

(46) 得 ↓ 自得 「二五四五・一二三ウ」

(47) 祇 ↓ 祇 「二六〇一・一二六ウ。元版の「てんの」
てんの みちのかみ てんのかみちのかみ

の下の「か」はきわめて薄くて讀めない」

(48) しう ↓ しう 「二六一九・一二七ウ」

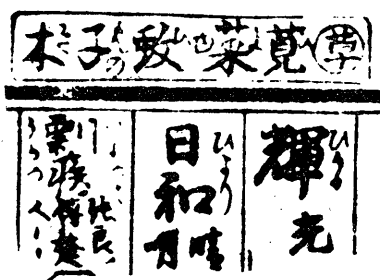
(49) しゆ ↓ しゆ 「二七二八・一三二ウ」

(50) 修復 ↓ 修復 「二七四七・一三三ウ」

(51) 揉 一言 一回 一比 向 道 ↓ 揉 一回 一寸
馬前足の所にて四尺一寸

をひとき二寸をふたき 「二八三オ・一三八オ」
きハよみくせ

(52)



元版にはないが、補訂版には、
二八五六・八・一三九オの上部
欄外に、「【草】荳 蚊子
木」とある。

(53) 不計 ↓ 不計 張良ノ
傳楚 「二八五八・一三九オ。右の圖版参照」

(54) 檀 ↓ 白檀 「二八九二・一四一オ。⑬は「白」の墨筆書入れ」

(55) 微服 ↓ 微服 「二九〇一・一四一ウ」

(56) 賞 物 ↓ 【言】賞 物 「二九二八・一四二ウ」

(57) 毛髮 ↓ 馬渡 姓 「二九五三・一四四オ」
江州河の名ニモ

(58) 蓮花 一〇 ↓ 蓮花 子 「二九六二・一四四ウ」

(59) 税 飲 ↓ 税 飲 「二九九三・一四六オ。②の左ルビはかなり薄

いけれども、⑧や⑬は⑭と用様に明らかに「ねんぐ」と讀める」

(60) 梅檀 金鈴子 仙棟子 同 金鈴子 子
あまのこ 金鈴子 あまのこ 仙棟子 あまのこ 金鈴子 あまのこ 子
 「三〇二4〜5」

一四七ウ。補訂版の「金鈴子」の右の「子」は、元版の「仙棟子」の最下字であろう」

右の(7)において、元版の繪が漆姑(はなひりくき)であつたのを、補訂版では花苺(はながつみ)に變更した。それで、苺を彫るというようにな注記がはいっているであろう。

(42)における諸本の状態から考えて、元版にも先刷りと後刷りとがあり、①が原初の形であるように推測される。

(43)の右側のルビは元版の「じゅばん」から補訂版の「じばん」へ訂正された。左側のルビの「しゅはん」は、おそらく「じゅばん」と濁つて讀むのであろうから、元版のままでは、右と左に同じ讀みを付したことになる。それで「じゅ ↓じ」の訂正が行なわれたと考えられる。この語は、二七四4・一三三ウにも「襦衫じゅはん」と出てい

て、この個所では元版も補訂版も同一の状態を示している。なお「じゅばん」の源が「じばん」であるという従來の説は、石綿敏雄氏『襦袢の語原』(『國語學』68 42年3月)によつて批判されたが、二七四6・一三三ウの「しゅはん」は、「しゅ ↓し」の過程で音變化したのであろうか。『大言海』の「シュビン」の條に、言經卿記の慶長八年二月二十五日の「しびん」の用例が出ている。

舊稿の訂正を一ついたしたい。

いつきがつき 寵愛 (10頁) ↓寵愛

ほかに俗語の類として示した「嬌奔夫婦どれあいめおと」や「如鷺々にようろく」などは、

「手應座應てうざおう」(二〇三6・九八オ)などと共に前田勇氏『近世上方語辭典』に用例が見られる(『蘭語譯撰』所載のハヤミチ―財布の意―の用例もこの辭典にある)。しかし本書に俗語の注記を施している

「りよきやう」旅況りよきやう (六五9・二九オ)のごときは載っていない。この語はおそらく京都あたりの知識人の間で當時「旅のようす」の意で使用されていたのではないかと思われる。俗語という注記は和製漢語かと疑わせられるけれども、『大漢和辭典』によれば明の高啓(一三三六〜七四。小杜甫と稱せられたが刑死した)の詩に

若見み故人詢と旅況りよきやう、知君解說不煩し煩書。
 という用例がある。

「し ↓ひ」の例として舊稿に挙げたほかになお左の例が拾える。

① 七 也 (二八四6・一三八ウ)

② 叱ひかる人 (二八五6・一三九オ)

③ 必濃ひつこ (二五八7・一二五ウ)

④の漢字のサンズイの部分は元版も補訂版もニスイになっている。この字は「漆」の俗字であつて、漢數字の七の代りに證書類に用いられることがある。七を「ひち」と言うのは關西方言かと見られる(『近世上方語辭典』参照)けれども、明治初年の東京下町の話しことばを忠實

に示しているときされる『英和通信』(『大阪女子日本英學資料解題』三五一頁)にも、七時を *hichij* あるいは *hichij* というふうに、シ ↓ヒ

と訛つてローマ字綴りされている(前掲書および『京都市立西京商業高等學校所藏學關係資料解題』六三頁)。「青漆」の場合にも『蘭語譯撰』ではセ

イヒツと振りがなしている(複製本『蘭語譯撰』の解題四一頁)。もつとも本書では「青油衣漆」(二九九二・一四六オ)とあつて訛つてい

ない。⑥の「しかる ↓ひかる」は次のような證例によつて上方訛りと考えられる。

畿内にて ひかる と云は しかる なり(安永四年版『物類稱呼』、岩波文庫一四一頁)

そりやく。上方もわるい。ひかり人ツサ。ひかるとは稻妻かへ。おつだネエ。江戸では叱るといふのさ(文化六年序『浮世風

呂(二上)』、岩波文庫七三頁)

◎は「必」という漢字を宛てていることから見ると、廣川獬は「ひつこい」の方が正音と考えていたのかも知れない。「ひつこい」の用例は湯澤幸吉郎博士『江戸言葉の研究』などに擧がつている。

これらの「し ↓ひ」とは逆の「ひ ↓し」の例としては

直垂 出ず (二五七四・一二五オ)

がある。が、注記のように「直垂」(二八五九・一三九オ)として後掲し、説明を「ひたゝれ」の方で付けていることから考えると、「ひたゝれ」の方が正しい言いかたであると認めていたように思われる。

「ゆ ↓い」の例には舊稿で示した「湯氣」のほかに、「粥」(八四二・三八ウ)がある。二七四六・一三三ウにも「粥」とあつて、「かゆ」というルビは一つもない。本書末尾に付載の著目中に『備急方』があり「次出」としている。もしこの書が刊行されているとすれば著目の年時である文化十一年六月よりも後のはずである。日比谷圖書館加賀文庫に『掌中備急方』という横長(縦六・五釐、横一七・七釐)の版本がある。刊記はないが序文の末に「享和三癸亥九月／隨時堂撰」とある。隨時堂というのが誰であるかはわからないが、もし享和三年の頃の刊行であるとするならば、もちろん廣川の著書ではない。この書は救急用の醫書で、本文はかたかなまじりの文語體で記され、所々にゴ體がある。この本文中に「粥」の語が出てくるが、カユとあつてカイとは記されていない。すなわち凍死者の救護を述べたところに

正念付タラハ酒トカ|ユト少シヅ、口へ入ベシ(二七オ)

とあり、一七ウにも「粥」とある。したがつてこの書の刊行が文化十一年六月以降であつたとしても廣川の著述と見ない方が穩當であろう。ただし廣川の『備急方』が、隨時堂の『掌中備急方』の影響を受けたか否かについては、將來の研究に待つ。なお先般刊行の『國書總目録第六卷』に、『備急方』が「一冊、寫、藥物、權田直助編、安政六年」と見えるけれども、廣川と關係があるか否かについては、これを藏する無窮會が移轉による藏書整理のために調査することができなかった。

逆の「い ↓ゆ」の例には、「梅雨」(一三〇九・六一ウ)や「火

「爐」(二四〇九・一一六ウ)が見られる。「つゆ」は「ついいり(↑つゆいり)」とも言う(易林本節用集・伊京集)が、末音「り」の脱落からと見る要はあるまい。「ゆろり」については、中世にすでに「ゆるり」がある(拙稿「中世の謎について」——『佛教大學研究紀要52』43年3月)。

前述の『掌中備急方』には灸の個所を示す圖(鬼哭鬼眼之圖)がある。これよりも早く辭書風のもので繪入りのものとしては明和九年(一七七二)刊の『學語編』がある。しかし刀鉄類および耕具類の、キリ・スキ・クワ・カマ・イネカケに限定されていて、『蘭例節用集』への影響は認められない。

最後に、七四五・三三ウの「和蘭陀」に注記して

開國ハ唐の平帝二、△⑤はここに讀點がある、本朝垂仁帝卅、寛政七迄、千七百九十五年、吾邦里數にて、凡一万三千里、彼國ハ日本の二里を一里とす

とするが、これは本書を編む際の素材となつた文獻類にこのような記述があつたのであろうか、それとも廣川獬(ないしは序文に言う「二三子」)自身によつてこのような注記が作成されたのであろうか。もしも後者であるとするば、原稿——少なくともこのあたりの——作成の時期が寛政七年であることを示すことになるであらう。

〔後記〕新村徹氏をはじめとする貴重資料所蔵の各機關・個人の學惠に對してあつく感謝の意を表し、御教示を賜つた高橋貞一博士に御禮申し上げます

蘭例節用集の補訂版について

す。
この小稿は昭和四十三年度文部省獎勵研究費(B)による研究成果の一部である。(一九六九、三、三一)

〔注〕一四・一一五頁の(9)・(40)の圖版が原本の不明明さにもよるけれども、讀取りがたいことを校正途上で認めたので、稿者が原本について判讀を試みたものを示す。

(40)	あさくさ 草	江 戸	あさかやま 安積山	奥 州	實方卿重陽あやめなくバかへよといふ 花白實堅とす又田字草同名葉 花の如くかたハミの如し淺香を出す 即淺香沼に はながつみ生す (繪)はななかたバミ
(9)	はなひり 漆姑 たかのつめ	はながつみ 花苳	影		朝香 勢 州